

大東仙界伝  
——章——

風籙真人

目次

大東仙界伝 - 一章 -

あとがき

## 序

ザアアア・・・

緑の大地。ところどころに花が咲き、小川が流れ、空気はとても澄んでいます。小高い丘の向こうには山がそびえたち、高原に暮らすさまざまな生き物たちを見守っているかのようです。

そんな中に、一人の少女がたたずんでいます。顔立ちはまだ幼いのですが、しかしながら、目を閉じ、口を真一文字に結んだ様子は真剣そのものです。少女は、一枚の布に穴を開けて首を通しただけの、いわゆる貫頭衣を身にまとい、微動だにせず屹立しています。

ゴォッ！

ふいに、少女の周囲の空気の流れが不自然に変化しました。渦を巻き、少女の正面に集まっているかのように見えます。少女の正面の空気の密度は見る見るうちに増し、限界を超えてその体積さえも膨張させていきます。

少女が目を開いて構えをとります。右足を後方へ引いて体重を乗せ、右の拳を硬く握って腰のあたりに当てて左手を添えます。

「はぁっ！」

声と同時に拳を打ち出し、空気の塊を殴りつけました。空気の塊は一直線に、正面に立てられた青銅の板へと向かっていきます。そして、すさまじい衝撃と爆音とともに、青銅版は木っ端微塵に・・・砕けはしませんでした。板にあたる直前、空気の塊は霧散し、板には傷ひとつとてついてはいません。少女は静かに足をそろえて両腕を下ろしました。

「あーもうっ！また結界を強くしたなぁっ！」

少女は腰に手を当ててむくれています。どうやら青銅板には結界が張られていて、それが空気の塊を霧散させてしまったようです。

「まったく、どこまで強くすれば気が済むんだろ。絶対わざとやってるわよね。ヤなかんじ」

「ねえ清華、あの結界って師匠が張ったの？」

どうやらこの場にはもう一人少女がいたようです。こちらの少女は、足首までとどく長いゆったりしたスカートと、赤を基調にした鮮やかなベストのようなものを着ています。

清華と呼ばれた少女は、ひざを抱えて地面に座っているもう一人の少女に向き直って言います。

「だと思うよ。あの板は師匠が立てたんだって、春

麗が言ったんじゃない。だったら結界も師匠が張ったんでしょ」

春麗と呼ばれた、見た目小柄な少女は、あごをひざに乗せて、ふーん、と気のない返事をしています。彼女にとってはたまらなく退屈な時間のようです。

「清華あ、そろそろ帰ろうよ。太陽ももうすぐ真上だし」

「そうだね。私もおなか減ってきたし、帰ろっか」なるほど、二人の影がだんだん短くなってきました。そろそろお昼ご飯の時間です。清華は額の汗をぬぐって、春麗と並んで歩き始めました。遠くのほうでは、昼食の準備をする煙がいくつも立ち上っています。

## 壺

古代、中国では、自然界のすべてのものには神が宿っていると信じられていました。数多の神々がそれぞれの力を調整しあい、世界を形作っていると信じられていたのです。その神々のすむ世界を『神界』と呼び、また、人間たちの住む世界を『人界』と呼びます。

この、神界と人界の間にもうひとつの世界がありました。選任たちの暮らす世界、『仙界』です。仙界は、崑崙山を中心とした世界で、仙界の東半分を治める東王公、崑崙山の頂上に暮らし、仙界の西半分を統治する西王母、同じく中腹に暮らす元始天尊、仙界最高位の仙人である太上老君の四人によって統治されています。

仙人は、厳密には「仙骨が覚醒した人間」でして、ようするに「人ならざる人」と解釈できます。ですから、人界で生まれた人間でも、その体内に仙骨が秘められていれば、修行しだいで仙人になることができます。もっとも、仙骨の覚醒は本人の深層意識に大いに影響されるので、大抵の人間は自らに仙骨が備わっていることを知らずに一生を終えるので

すが。

仙人は性別によって「男仙」「女仙」と区別されていて、

「ただいまー！」

おや、清華が帰ってきたようです。春麗も一緒です。ちなみに、ここは清華と春麗が神術を習っている道場です。二人の師匠である青峰がとりしきっています。食卓に並べられた昼食も、すべて青峰がこしらえたものです。

「おかえりなさい、清華姉さま！」

「あ、ただいま香茜。待ってて、着替えてくるから」

「はあい」

この香茜という娘は青峰の妹の娘で、青峰にとっては姪に、春麗にとってはいとこに当たります。あ、申し遅れましたが、春麗は青峰の実の娘です。ところがこの香茜、春麗よりも清華になついているのです。それがどうしてなのかはわかりませんが、清華は清華で、香茜を妹のようにかわいがっています。春麗もそのことを気にする風でもなく普通に接しています。

「お待たせ。さ、食べよ！」

清華が食卓につきます。すでに春麗と香茜は食卓に

ついていたので、三人で食膳の行を唱えて食事を始めます。

では、清華たちが食事を取っている間に、仙界での食習慣についてお話ししましょう。仙人というのは、本来食事をとりません。と言うのも、仙骨が覚醒すると、人間が本来持っている「生きるための本能」の大部分が欠如するのです。ですから仙人は食事もとらないし、特別な場合を除いて睡眠もとりません。今も、食事をこしらえた当人である青峰は食事をとっていませんが、彼女は女仙として立派に仙骨が覚醒しているがゆえに、食事を必要としないのです。

では、清華たちは女仙ではないのか、と言うと、それは正解でも間違いでもありません。正確には、清華たちは女仙見習い、これを道姑と呼びます。道姑は、仙骨がまだ覚醒しきっていない状態ですので、食事もとらず睡眠もします。道姑は多くの修行を積んで女仙となり、そうなると食事が必要なくなるのです。清華と春麗は今修行の真っ最中。だんだん仙骨が覚醒に向かっているのですが、香茜はまだ幼いので修行を始めていません。なので、

「ごちそうさま！香茜、先行ってるよ！」

「ああっ！清華姉さま、もう少し待ってくださいよ

お」

こういうことが起こるのです。清華と春麗は香茜ほど食事の量が多くないので、香茜はいつも置いてけぼりなのです。

「ごっ、ごちそうさまでした！」

香茜もようやく食事を終えたようです。食器をもって台所へ片付けに行きます。これから清華と春麗の午後の鍛練が始まるのですが、香茜はいつもその傍らで見学しているのです。香茜もいずれは修行をはじめめるのですから、今からその準備をしようと

「清華！いるか！？」

うーむ、どうも今日は話を中断させられることが多いようです。今駆け込んできたこの少年は、名を蒼俊といいまして、清華の義理の弟にあたります。詳しいことはあとでご説明しますが、この蒼俊、とにかく突っ走るタイプでして、何かと清華に突っかかってくるのです。ですが、そのたびに清華に負けているものだから、

「また来たの？勝てないんだから、いい加減にあきらめたら？」

「っるさいな！俺はお前にだけは勝ちたいんだよ！」

「なにをそんなにこだわってるんだか。でも今日はだめ。これからもう鍛錬が始まるんだから」

「少しくらい時間あるだろ。それとも何か？俺と戦うのが嫌なのか？」

「ああ、それはあるわね。あんたと戦っても面白くないから」

「あんだと～？言わせておけばっ！」

蒼俊がいきなり清華に向かっていきます。蒼俊も多少修行を積んだ身、そのこなしは並の人間をたやすく凌駕します。ですが、今の相手は清華です。こちらにも並の人間ではないのですから、結果がいつものとおりになるのは目に見えています。

「蒼俊？いたの？」

「ぎゃあっ！」

食器を片付け終えた香茜が顔を出した途端、蒼俊が前につんのめりました。ちなみに、清華は指一本触れていません。触れていないどころか、全く動かしてもいません。蒼俊はゆっくりと立ち上がります。

「香茜！いきなり声かけたりするなよ！おどろくじゃないか！」

「えっ……あっ……ごめん。私、そんなつもりじゃ……」

香茜の表情が見る見るうちに曇っていきます。今にも泣き出しそうです。

「あっ……いや……あの……い、いいんだけどさ、その……ごめん……」

おや？ 蒼俊の頬が赤くなっています。場にしばらくの沈黙が流れました。

「きょっ……今日のところは勝負は預けるっ！次に会ったときは絶対ぶっ倒してやるからな！」  
清華をにらみつけてそう言うと、蒼俊は出て行ってしまいました。これではいったい何をしにきたのかわかりません。

「なーにが勝負がお預け、よ。そっちがぶっかけてきたくせに」

「清華、そろそろ行こう。師匠が待ってるよ」

「そうだね。あんなやつのことなんか、この際忘れよう」

蒼俊、自業自得ですね。まだまだ修行が足りないようですよ。

そんなわけで、清華、春麗、香茜の三人は、今までいた母屋に隣接した道場へと向かいます。これから午後の鍛錬がはじまるのです。この時点では清華も春麗も、これから起こる出来事など知る由もあり

ませんでした。それはまた別の話。今は彼女たちの鍛錬に付き合うことにいたしましょう。

鍛錬といっても、ひたすら組み手をして技術を磨いていくようなものではありません。清華たちが行う鍛錬というのは、主に気持ちを落ち着けて集中し、仙骨の覚醒を促すもので、毎日の鍛錬の最後に整理運動的な意味で組み手を行うのみです。ですから今も、清華と春麗は目を閉じてひたすらに瞑想しています。香茜はその脇で、かなり緊張して様子で正座しています。

道場に青峰が入ってきました。清華と春麗の邪魔にならないよう、気配はもちろん消しています。青峰は静かに二人の前に腰を下ろし、二人を見守ります。師匠としての青峰の役割は、こうして二人の仙骨の覚醒を見届け、現在は自らが目録を持っている六花乙流の後継者を見極めることです。

あ、六花流についてはまだご説明していませんでしたね。六花流は、正式には六花流神武術といって、本来は異質のものである神術と仙術を、ある特殊な

要素によって融合させた武術です。二十八代目の時代に、その才を二人の男女が継承したことから、以来甲流と乙流に分かれました。甲流は男子が、乙流派女子が継承するのが慣わしになっていまして、清華と春麗は乙竜の継承者候補なのです。そして、実は清華の義弟である蒼俊も、甲流の継承者候補なのです。

神術と仙術を結びつける要素というのは遺伝的なものではありませんので、六花流は発端以来単一家系で継承されてきたわけではありません。その要素を秘めてさえいれば、全く別の家の者でも六花流の継承者候補になります。また、六花流の語源は文字通り「六つの花」でして、桜、菊、蘭、梅、椿、藤を指しています。流派を継承したものの体には、継承した才に応じていくつかの花の印が体に刻まれます。現在の乙流の師範である青峰の体には、桜と蘭、それに藤の印があります。術を行使しようとするとき、その印は目に見える形で体の表面に浮き出てくるのです。残る三つの印、すなわち菊、梅、椿の印は、現在の甲流の師範で蒼俊の師匠である東老師が持っています。今頃は、蒼俊も午後の鍛錬の真っ最中でしょう。

鍛錬が始まってずいぶん時間がたちましたが、清華と春麗は相変わらず瞑想を続けていますし、青峰はそれを見据えているだけ。香茜も背筋を伸ばして、緊張した面持ちで見えています。先ほど、この瞑想は仙骨の覚醒を促すものである、とご説明しました。実はここ最近、清華の持つ仙骨が急速に覚醒に向かい始めていまして、そのために清華の仙気の波動といますか、そういったものが清華の周囲に渦巻いているのです。香茜もそれを見て緊張しているのでしょう。また、清華の発する気の流れは、すぐ隣で瞑想している春麗も当然感じているはずですが、春麗は自分のペースを守って、決してあせることなくじっくりと仙骨を覚醒させていきます。青峰はこの清華の変化を喜ばしく思っているようで、このままいけば乙流の目録を継承する日もそう遠い話ではないと考えているようです。

香茜が立ち上がりました。気配を消し、音を立てずに道場の入り口のほうへと向っていきます。そのまま道場を出て少し歩き、さまざまな花々が咲き乱れる花壇の前まで来ました。

「　　つぶはあ！」

ため息・・・というよりは、ようやく呼吸ができ

たという様子で大きくひとつ息をつきます。長い間張り詰めた空気の中にいたので疲れてしまったのでしょう。まだ幼い香茜のこと、こういった雰囲気には慣れていないのです。

「はぁ・・・健康によくないなぁ・・・」

仙人というものはそう簡単に病気になったり体調を崩したりはしないのですが、おそらく感覚的なものでしょう。仙人にも「心労」というのはあるのです。

「清華姉さま、最近すごいなぁ。あたしなんか、あの場にいるだけでこれだもんなぁ。はぁあ・・・どうしよう・・・」

香茜は、自分が修行をはじめて今の清華のような状況になったときに、果たして平常心を保っていられるか、ということに危惧しているのです。これが清華であったら、自分が修行を始めるころにはきちんとできるようになっているだろう、というように楽観的に見ることもできるでしょう。現に清華はそうしてきたのです。ですが、あいにく香茜はそういう性格ではありません。よく言えば慎重、悪く言えば臆病なのです。

「そんなところで、何をしているの？」

「あ、おば・・・師匠・・・」

おばさま、と言いかけて、香茜は改めました。清華たちの修行を見るのと同じように、心の準備をしておこうと考えているのです。青峰はそんな香茜の考えを知りつつ、小さく笑みを浮かべて声をかけます。

「おばさま、でいいわよ。あなたはまだ春麗や清華とは違うんだから」

「はい・・・」

「どうしたの？元気がないみたいだけど」

「あの・・・」

香茜はうつむいてしまいました。口にするのが恥ずかしいのでしょうか。青峰はそれを見て、息をひとつついてから言いました。

「そういうことね」

「えっ・・・」

「いいこと？清華だって、ちょっとやそっとの修行であそこまで上達したわけじゃないのよ？それは誰だって同じ。あなただって、たくさんの修行を積んで清華たちみたいになっていくの。今から落ち込むことなんてないわ」

青峰は、将来の師匠としてではなく、姪にとっての伯母として、優しく香茜を諭します。香茜も、それ

によっていくらか気が楽になったようです。

「わかりました。前進あるのみ、ということですね。

それよりおばさま・・・・」

「ん？なあに？」

「清華姉さまたちは？見ていなくてもいいんですか？」

「大丈夫よ。もうそろそろはじまるころね」

「え？なにがで・・・・」

「やあっ！！」

道場のほうから、なにやら叫び声が聞こえてきました。鍛錬の仕上げ、組み手が始まったようです。ちなみに今のは清華の声です。春麗はこんなに大声を張り上げることはめったにありません。

「行きましょう。あなたもしっかり見ておきなさい」

「は・・・・はい！」

香茜は小走りで道場へと向かいます。青峰もゆっくりとあとについていきます。道場からは、清華の元気な声と打撃音が入り混じって聞こえてきています。

「あなたたちに、話があります」

そう言って、青峰は清華と春麗を自分の前に座らせました。真剣な表情です。二人とも、何と話しに嫌な予感を感じます。

「玄圃の丘の向こうに、私が立てた青銅の板があるのは知ってますね」

すなわち、午前中に清華が風の球を打ち付けた板のことです。あの地域一帯は「玄圃」と呼ばれる仙界有数の花園で、四季を通じて色とりどりの花々が咲き乱れています。

「その青銅版に施した結界の強度が、最近めまぐるしく変化しています」

清華と春麗がそろって、えっ、と驚きの声をあげます。

「あれって、師匠が変えてるんじゃないんですか!？」

青峰は首を振ります。

「いいえ

、違うわ。何者かによって操作されているの。大きな変化を続けると、結界事態の安定性が失われて、結界が破られることになります」

清華は、ギクリ、となりました。おそろおそろ青峰にたずねます。

「あの・・・師匠？私、だいぶ前からあそこで鍛錬してるんですけど・・・」

「そのことは存じています。青銅版を標的にしていたことも。ですけど、そのことは今回は関係ありません。安心なさい」

清華は、ホッ、と胸をなでおろしました。隣で、春麗も安心したような様子です。いつも清華の鍛錬に付き合っている手前、気が気ではなかったのでしょう。

「それで師匠、私たちにお話とは何ですか？」

春麗の問いに、青峰は一呼吸おいて答えました。

「あなたたちに、人界へ向かってもらいたいのです」

「ええ！？」

「今回の件に関して仙界上層部は、仙界以外の外界に原因がある可能性も考えているようです。これほど強大な変化を外界から及ぼすのは、高度に仙骨が覚醒した人間、あるいはそれに順ずる物である可能性もあるということですね」

「でも、どうして私たちに？」

青峰は再び間を取りました。そして、続けます。

「西王母様直々のご指名だそうですよ」

今日何度目かの、そして今日一番に驚きを、清華と春麗が見せます。それはそうでしょう。西王母といえば、仙界の西半分の統治者にして女仙と道姑の長です。清華たちにとっても、最も尊敬すべき存在なのですから。

「どうして西王母様が私たちのことを……？」

「どうしてかは私は存じません。ですが、西王母様はあなたたちに一目置いておられる、ということです。

二人は、はぁ、と生返事をしてしまいます。あまりに衝撃的なことを言われたので、まだ落ち着きを取り戻しきっていないのです。

「詳しい任務については、後日西王母様から直接伝達があります。そのときは宮殿に赴くことになりま  
すから、心の準備をしっかりとっておきなさい」

「はい……わかりました……」

「わかりました……」

二人とも、青峰の言葉をちゃんと聴いているのでしょうか。なんだかぼーっとして、心ここにあらずといった様子ですが。

「話は以上です。午後の鍛錬も終わりましたから、あとは夕食までゆっくりしていなさい」

そう言って、青峰は道場をあとにしました。清華と春麗だけがぼつんと残されます。そして、春麗が先に口を開きました。

「人界……だって」

「人界……みたいだね」

「どんなところなんだろ……」

「どんなところだろうね……」

「清華ぁ……」

「なに？春麗」

「怖い？」

「まさか。むしろすごく興味がある。ワクワクするよ」

「私も。一度でいいから、仙界の外に出てみたかったんだ」

ようやく落ち着いてきたと思ったら、今度ははしゃぎ始めました。やはり、まだまだ子供のようです。好奇心旺盛というか、危険を知らないというか。なんいせよ、活発なのはいいことです。

こうして清華と春麗は人界へ向かうことになりました。ですが、この話にはもうひと仕掛けあった

のです。けど、それはまた別の話。西王母に会うために宮殿へ赴く日が、刻一刻と近づいています。

仙界の中心に位置する崑崙山。その頂上に、西王母とその娘の公主たち、そして数々の侍女たちが暮らす玉虚宮があります。頂上といっても、その広さは人界の大きな町がひとつ、丸々収まってしまうほどですから、頂上というよりは台地といった感じです。

崑崙山頂上は、すべての女仙と道姑を収める西王母の住まう地。ですから当然、男子禁制です。西王母やその公主たちに仕えるものの中にも、男子は一人もおりません。一様に女性ばかりです。

「ひゃ　　」

青峰の飛雲に乗って、清華と春麗がやってきました。見たこともない巨大な宮殿に驚いているようです。

「こんな大きな建物、仙界にあったんだ」

「崑崙山に登ったことなんてなかったから、全然知らなかったよね」

そうなのです。清華たち一般の道姑や女仙は、た

いていは崑崙山のふもとの周辺に住んでいます。道姑だけでなく、同土や男仙もそうです。ただ、住む地域だけはある程度区別されています。ですから、多くの道姑や道士は玉虚宮を見たことがありません。修行を積んで仙人として認められたときに玉虚宮に赴くので、女仙や男仙なら入ったことがあるのですが、経験の少ない道姑たちはまだ入ったことがないので。清華と春麗も、そんな中の一人でした。

「春麗、清華」

青峰が二人に声をかけました。

「西王母様の御前だからといって、無理に緊張することはありません。最低限の礼節をわきまえ、西王母様や公主様たちに失礼のないように。それだけ気をつけていれば十分です」

「はい」

「わかりました」

二人が返事をする間に、飛雲は高度を下げ、地面すれすれまで降りていきました。目の前には、玉虚宮の壮麗な正門がそびえ立っています。

「さあ、行きなさい。もうすぐ時間ですよ」

二人は飛雲から降り、門をくぐって宮殿へと歩いていきます。二人の胸は、期待と緊張で高鳴っていま

した。

「頭をお上げなさい。固くなることはありませんよ」

西王母は笑って言いました。もっとも、西王母の微笑んだ顔以外の表情を見たことがある者はほとんどいません。何百年もの長きに渡り、不屈の微笑みをたたえて玉座に鎮座しているのです。

「青峰から話は聞いていると思います。あなたたちに、人界へ向かっていただきたいのです」

清華と春麗は緊張した面持ちで西王母の話聞いています。固くならなくてもよい、言われても、やはり緊張するのです。

「今回のあなたたちの任務は、青銅版の結界を操作している原因を探し、見つけ出すこと。それ以上のことは要求しません。発見次第仙界に帰還し、それに関することを報告してください。あとはこちらで処理します」

そこまで言うと、西王母は傍らの九点玄女に命じて、何かを持ってこさせました。どうやら、服のようで

す。

「不測の事態に備えて、あなたたちに道着を渡しておきますね。私の三番目の娘が織ったものです。糸に私の仙力を込めてありますから、何かあっても多少のことならあなたたちの身を守ってくれます」

清華の道着は緑を、春麗のものは朱色を基調にしたもののようです。どちらもシンプルなものですが、控えめに飾られた刺繍は、それは綺麗なものです。

「娘は、もっと飾りをつけたいといったのですがね。九点玄女がそれをとがめましたので」

「飾る必要のないものですから。あくまで機能が第一です」

九点玄女の、西王母とは正反対の凛々しい表情で言われると、なんとも迫力満点です。清華と春麗の緊張に、さらに拍車をかけてしまいそうです。

「では、出発は三日後。それまでに仕度を済ませて、西の冥門に来てください。そこから人界へ向かっていただきます」

「はい！」

二人は大きく返事をしました。元気がよくてなかなかよろしいことです。

「何か質問はありますか？」

「はい。あの・・・」

春麗が口を開きました。少し考えてから、続けます。

「行くのは、私たちだけ、ですか？」

西王母は、ああ、と思い出したように手をポンとたたき、九点玄女に確認して二人に告げました。

「人界でもう一人合流することになっています。どんな者かという・・・」

西王母は、いたずらっぽく人差し指を口唇に当てて、

「それは、会ってからの楽しみにしましょう」

二人は、はあ、と、ちょっと気抜けした様子です。

西王母は、二人がもう質問しないと判断すると、最後に言いました。

「他になければ、今日は終わりです。今回の任務は仙界の将来にかかわる重要なものですから、気を引き締めてしっかりやってください」

「はい」

こうして、清華と春麗の初めての宮殿訪問は終わりました。二人はこの先の三日間、いつものように鍛錬する傍ら、人界へ向かう準備をします。

そして三日後、西王母に指定された西の冥門から、二人が人界へと降り立ったのです。

## 式

人界の中にもたくさんの世界があります。人間たちはそれを「国」と呼ぶのだそうですが、数ある国の中で今最も活気に満ちているのがアジア州、とりわけ「大韓民国」の熱気はものすごいといいます。人々の日々の暮らしは決して裕福とはいえず質素なものです。皆が皆活気に満ち溢れ、元気に生活しています。

「オモニ！キムチチュセヨ！」

今のは大韓民国で使われている言語「韓国語」で、聞くとところによると「おばちゃん！キムチちょうだい！」といった意味だそうです。「キムチ」というのは大韓民国の国民食のひとつで、それはもうとんでもない辛さなのですが、その人気は高く、最近は大韓民国国内だけでなく、お隣の「日本国」でも人気があるとのこと。

そう、ここは市場。それも、一日のうちで最も活気のある「朝市」です。そしてその真っ只中に、清華と春麗はいるのでした。

「ひぁーーーーっ！！」

いきなりなんだというのでしょうか。清華が素っ頓狂

な声をあげます。ここは先ほどの漬物屋の前です。清華の前には……ははあ、さっそくキムチを食べてみたのですね。仙界にはない食べ物ですから興味があったのでしょうか。案の定、その好奇心があだになったというわけです。

「なにこれっ！舌がヒリヒリするっ！」

「キムチだよ。お嬢ちゃん、キムチははじめてかい？」

「はひ……はひ……」

「はじめてだよ。私たちが住んでるところにはないからね」

まだ舌の痺れがとれていない清華に代わって、春麗が答えます。初対面でも気兼ねなく会話を持ちかけてくるとは、大韓民国の人々はとても友好的なようです。二人もごく自然にとけこんでいます。

「そうなのかい。お嬢ちゃんたち、どこから来たんだい？」

「ええと……」

春麗は考えました。まさか「仙界から来た」などとは言えません。そういえば青峰が、大韓民国というのは人界の東のほうにある国なのだといっていたのを思い出しました。

「えっと、西のほうから」

どうも不自然な答えだとも思いましたが、屋台の中に立っている恰幅のいい女性はそれで納得したようです。

「じゃあ仕方ないねえ。中国でもほんの一部の地域でしか辛いものは食べないらしいからね」

中国というのは、正式のは中華人民共和国といいまして、大韓民国とは国をひとつ挟んだ隣に位置する大きな国です。大韓民国とは話す言葉も食べるものも全く違うのですが、国の間での交流は盛んなようです。

「辛いのがだめなら、こういうのはどうだい？日本の友人にもらったんだけどさ」

女性は屋台の奥から別の漬物を出してきました。キムチのように赤くはないですが、使われている野菜は同じもののようです。

「あ、これおいしい」

舌の痺れから立ち直った清華が早速味見をします。今度のは抵抗なく食べられるようです。

「浅漬けっていうんだとさ。あっさりしてて、これはこれでおいしいだろう？」

「うん、おいしい。おばちゃん、これ少し分けてく

れない？」

「気に入ったかい？ちょっと待ってな。袋に詰めてあげるから」

女性は小さな袋に漬物を入れて口を閉じ、清華に手渡しました。隣で春麗が、袖から小さな板のようなものを取り出します。

「お金はこれくらいでいい？」

「あら、お代はいらないよ。もともと売り物じゃないし、あたしからの贈り物だと思っておくれ」

「はあ、すみません」

「いいんだよ。これからどうするんだい？」

「人を待ってるの。もう少し言ったところなんだけど」

「そうかい。気をつけてね」

「うん。ありがとう」

「おばちゃん、またね！」

市場を離れた清華と春麗は、そこから少々東へ進んだところにある大きな競技場へやってきました。建物には大きく「仁川競技場」と書かれています。

「春麗、ここじゃない？」

「仁川競技場……。間違いない、ここね」

実は、西王母が言って痛もう一人の仲間と合流する

場所が、この仁川競技場なのです。時間は朝市が終わるころと指定されていたから、もうそろそろ来るはずです。

「おっきな建物だねえ……」

「でも、玉虚宮よりは小さいよね……」

「わかんない。こんなに大きいと、こうやって下から見ただけじゃ比べられないよ」

「……」

「……」

二人して見上げているさまはなんとも滑稽ではありますが、仙界にはこんなに大きな建物はそうそうあるものでありませんから、やはり好奇心が働いているのでしょうか。

「……あの、清華さんと春麗さん？」

ふいに、一人の青年に声をかけられました。どうやら合流予定の仲間が到着

「え————っ！！??」

初対面の相手に向かってなにをいきなり。悲鳴とも思しき叫び声は清華のものです。……が、しかしこの青年は……。

「そ……そ……」

「蒼俊？」

そうなのです。声をかけてきた青年は、清華の義理弟の蒼俊にそっくりなのです。それはもう本人かと思まがうほどに。

「……いや、誰のことかわからないけど……。  
清華さんと春麗さんなんだね？」

「そうだけど……？」

春麗の返事を聞いて、青年は少々安心したようです。ひとつ息をついて、改めて自己紹介を始めます。

「はじめまして。朴敏河といいます。ミンハって呼んでください。お二人の案内役をするように言われてきました。どうぞよろしく」

よくよく見てみればこの青年、ミンハは、服装が蒼俊とは全く違います。いえ、蒼俊と、というか、清華たちとも違うのです。素材などにたいした違いはないのですが、デザイン的なものが異なっています。それに、背丈もずいぶん高いのです。

「ええと、ミンハはここの人なの？」

春麗が問いかけます。ミンハは少々怪訝は顔をしましたが、すぐに何かに思い至ったように答えました。

「うん、僕は韓国人だよ。二人は仙界から来たんだよね？」

「えっ……」

驚きました。人界に住む人間が仙界の存在を認知しているとは。普通は、こんなことはありえないことです。

「どうして、それを……？」

「実は、僕は人仙なんだ。仙界に行ったことはないけど、多少の仙術だったら使えるよ」

人仙というのは、体内に仙骨を宿している人間のことで。仙骨の覚醒度合いは清華たち仙界の道姑よりも劣ります。仙界で修行しながら生活することよりも、人界で人間として暮らすことを選んだ者たちです。人間社会の生活に適應するために、食生活や睡眠、寿命も人間たちと同じようになります。ただひとつ、ミンハの言うように多少の仙術が使えるのが人間とは違う点です。

「じゃあ、西王母様のことも知ってるの？」

「知ってはいるよ。ただ、僕は男だから東王公様から上司になるのかな。今回の任務も、東王公様から直々のご指名だって白鶴が言った」

白鶴とは白鶴童子、本来は太乙真人の使いですが、東王公の使いとしてもはたらいている鶴の妖精の少年です。

「とりあえず朝食にしない？僕ほどじゃないにし

ても、多少は食べるだろ？」

そうってミンハは歩き出しました。清華と春麗もあとに続きます。ミンハが両手に提げている袋の中には、食事の材料がたっぷりと入っています。ミンハはこのあと、自らの手料理で二人をもてなしてくれたのでした。

「それで、どうやって探そうか」

ミンハの自宅、アパートというそうですが、そこで朝食をとった三人は、本格的に作戦を練ることになりました。今回の任務は、あくまでも結界操作の原因を突き止めることが目的ですから、それ以外の余計なことは全く考えずに作戦を立てます。

「闇雲に歩き回って探すのは効率が悪いよね。僕の友人の人仙たちに手伝ってもらおう方法もあるけど、彼らではやっぱり役不足は否めないしなぁ」

「やっぱり私たちが感知するしかないんだよね」

「そうだね。よほど大きな仙力の波動が起きない限り、人仙が感知するのは難しいからね」

「でも、私たちが感知するにしても、範囲には限界

があるよ。仙界で修行してるっていても、まだ道姑なんだから」

「そうなのよね。私たち二人が別々に行動すれば、この国の大部分は何とかなるんだけど……」

「それだと、いざっていうとき危ないもんね……」

「うーん……」

春麗が考え込みます。よい策が浮かばないのは、清華もミンハも同じです。力の波動を感知できなければ、原因がどこにあるかを特定するなど到底無理なのですから。

「ミンハはこっちにいて、そういう波動を感じたことはないの？」

清華がたずねました。人界から仙界にまで影響を及ぼすのですから、不定期であるにせよ多少何かを感じたことがあるかもしれません。ミンハの答えは、案の定そういったものでした。

「何回かね、仙骨の状態に違和感があるなと思ったことはあるよ。でも、それがどこからきてるかなんて見当もつかないし、回数事態も右手で数えられる程度だからさ。ぜんぜん役に立たないだろ？」

「そっかぁ……。人仙ってそういうものだもんね……」

人選は仙人とは違います。体内に仙骨を宿しているといっても、彼らは人界で人間として生きているのです。幼いうちはまだしも、ミン八くらいの青年になると仙骨の能力はやや退化します。あ、覚醒と退化は別の次元のもので、くれぐれも混同なさいませんように。ミン八の仙骨はその“退化”によって、外部の仙力を感知する能力が衰えているのでしょう。人仙としてはかなり進んでいる“覚醒”によって、つなぎとめているようではありますが。「じゃあやっぱり少しずつ移動しながら探すしかないじゃん」

「結局、そうなるんだよね」

どうやら結論に達したようです。三人ともあまり気乗りしていないようですが、他に方法がないのですから仕方ありません。

「じゃあ僕は旅の準備をしなきゃな。それと、二人ともさ……」

ミン八が二人の服を指して言います。

「その服、着替えるわけにはいかない？ ちょっと目立ちすぎるよ。韓国じゃ、そんな格好してる人なんていないから」

たしかに、ミンハの自宅に来るまでの間に見た町の人々の服装は、清華たちとは全く違うものでした。腰の辺りで分かれているものが多く、上下で生地や素材や飾りを違えることができるものです。このような中に清華たちが混じれば、いやがおうにも目立つのは当然でしょう。しかし

「でも、これは西王母様が下さったものなのよ。西王母様の仙力が封じてあるの。だから変えるわけにはいかないのよ」

道着を手放すということは、せっかくの防御効果を失うことと同じです。そうなっては全く意味がないのですから、多少目立っても今のままの格好でいるほうが安全なのは言うまでもありません。

「そっか……。ならしょうがないね」

ミンハは立ち上がって、棚からいくつかの品物を取り出して身につけ、

「日本には、善は急げ、っていうことわざがある。良いと思うことは早めにやっつけてしまえということらしい」

「じゃあ、善は急げで」

春麗が立ち上がりました。続いて清華も。

「早速、出発だね」

三人はミンハの自宅を出ます。ミンハが、自宅の扉がきちんと閉まっているのを確認して、言いました。

「さあ、行こうか」

こうして三人は、この広い大韓民国を旅することになりました。目的となる、結界操作の原因を探すための本格的な旅です。清華と春麗にとってはわからないことだらけ。頼りはミンハただ一人。期待と不安が入り混じる、長い、長い、旅の始まりです。

その頃、仙界・玉虚宮の西王母の執務室。

「うまく接触できたようですね」

いつもと変わらぬ笑みをたたえ、西王母は正面の鏡に移る光景を眺めています。この鏡は、西王母の意思に応じてさまざまなものを映し出すことのできる特別な鏡です。

「しかし、どうして彼を案内役にされたのですか？  
もっと他に適任者がいたでしょうに」

傍らの九点玄女がたずねます。この部屋に入ることが許されているのは、部屋の主である西王母を除くと九点玄女ただ一人。公主たちですら入ることがで

きません。

「東王公殿は、清華たちに大きな期待を寄せているようですよ。二人に選出についても、東王公殿から直接依頼がありましたから」

「あの二人に、彼の力を……？」

「そのようですね。成功するかどうかは別として、試してみる価値はあるとお思いなのでしょう。私も賛成しました」

どうも、清華たちの旅の目的はひとつだけではないようです。清華たちですら知らされていない、もうひとつの目的があるようです。それを知っているのは、どうやら仙界中を探してもたった三人しか見つからないようですが。

でも今は、それも別の話としておきましょう。手がかりがない以上、追求することなどできはしませんから。

それではみなさま、今回はこのあたりで。また次の機会にお会いしましょう。みなさまに幸あらんことを……。

大東仙界伝 - 一章 -

E N D

## あとがき

大変ご無沙汰しております。お久しぶりです。風雑真人です。

まずはお詫びを。前作「トップ・シークレット」から実に7ヶ月もお待たせしてしまいまして、本当に申し訳ありませんでした。言い訳はいたしません。すべて僕の執筆能力の未熟さゆえです。

7ヶ月の間にさまざまな出来事があり、「大東仙界伝」の実執筆期間は2ヵ月半ほどです。それでもたったのこれだけ。忙しさと執筆能力の未熟さがこんな形になってしまいました。申し訳ありません。

では、本題の「大東仙界伝」についてお話ししましょう。実際のところ、中華ファンタジーを書くのは2回目です。中学のときに書いた処女作「万里幻想創世記」で1度経験しています。が、だからといってスイスイ書けたわけではなく、たしかにストーリー展開やプロット構築の面ではかなり楽だったのですが、やはりブランクというのは大きいもので、かなりてこずりました。キャラクターの個性を出すのに思いのほか手間取りまして、何度か書き直したのです。

では、キャラクターの名前について解説など。

・清華

「清く美しく」というのがはじめに出てきたイメージです。「清く」はそのまま使い、「美しく」といえば花だろうということで、ただ、「花」ではなく「華」を使いました。実際の清華はあんまり最初のイメージどおりにはいかなかったのですが（笑）

・春麗

コンセプトは清華と似ています。訓読みすると「はるうらら」ですね。実は、どうにも個性が出しにくかったキャラです。書き終わって気づいたんですが、「春麗」って某格ゲーに出てきてましたね。

・香茜

「茜」という文字を使いたかったんですね。これは単に語呂がいいので「香」をあてました。

・蒼俊

男の子を出そうと考えたとき、「蒼の文字はほしいな」と思っていました。青は好きな色なので。「俊」は、これも語呂がよかったので。

・ミンハ

実は、サッカー韓国代表の選手の名前をいろいろ吟味して作ったのです。漢字「朴 敏河」も、韓国代

表の選手の名前からいただきました。

さて、今回人界での舞台を現代の韓国にしました。通例ですと古代の中国、とりわけ唐の時代の中国がよく使われるのですが、そこは流行に乗りたくない性格なので、僕自身の設定を作り出してしまいました。お楽しみいただけただしょうか。

さて次回作ですが、今度こそ「AGPC 3 ~ 卒業物語 ~」を書きます。今回はミステリーっ気を全く取っ払って、彼らの純粋な日常を描こうと思っています。いつごろ書き上げられるかわからないのですが、どうか長い目でお待ちいただけるとうれしいです。

末筆になりましたが、この小説を読んでくださったすべての皆様に、心より感謝いたします。

2002年 初夏

風籬 真人

(c) 2002 SHINTO KAZANAGI

Printed in Japan.